

特集「全ての人とモノがつながる社会に向けたコラボレーション技術とネットワークサービス」の編集にあたって

塩澤 秀和^{1,a)}

近年の情報通信技術の発展により、我々は人と人がつながるコミュニケーションツールを日常的に使いこなし、世界中の情報と情報がつながるインターネットから知識を得、その環境は機械と機械がつながることで効率的に制御されている。さらに社会は、全ての人・モノ・情報が相互につながり、サイバー空間と現実空間が融合する新しい段階へと進んでいる。政府の第5期科学技術基本計画では、このような「全ての人とモノがつながる」社会を、狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会に続く「Society 5.0」と位置づけ、その実現によってさまざまな社会的課題を解決し、人間中心の社会を実現する技術革新が期待されている。このような新しい社会では、人工知能関連技術、IoT (Internet of Things) 技術などの発展によって、多数の人やモノがつながり、相互に情報を共有して助け合うため、これまでの情報社会 (Society 4.0) よりも桁違いに多様で幅広い情報を共有・連携する技術が必要になると予想され、まさにコラボレーション支援技術やネットワークサービスに関する学術的な知見が社会から求められているといえる。

このような状況認識に基づき、本特集では、時宜を得て迅速に関連する研究論文を一括掲載することにより、社会に成果を公開し、グループウェアとネットワークサービスに関する研究のいっそうの発展に寄与することを目指した。

本特集号には、31件の論文が投稿された。2018年4月に第1回編集委員会を開催し、投稿論文が特集号のテーマに合致しているか審議した。同年6月に第2回編集委員会、9月に第3回編集委員会を開催して査読報告を審議した。その過程で残念ながら3件が著者から取り下げとなり、最終的に10件が採録、18件が不再録と判定された。採録率は32%となった。このうち2件は英文論文である。

採録論文の内訳は、医療・教育・防災・セキュリティ・ソフトウェア工学を含むコラボレーション技術やネットワークサービスの応用に関する幅広い分野となり、特集号としての役割を果たしたと考えている。今回残念ながら不採録になった論文の中にもテーマやアイデアとして興味深いものは少なくなかった。この分野では研究の評価の難しさが

よく話題になる。今までにないテーマの研究では、どの程度の規模でどのような評価手法を用いることが適切であるのか、研究会等の場でも積極的に議論を行っていく必要性を感じた。著者の皆様には、ぜひとも研究を発展継続し、再投稿されることを期待する。

最後に本特集号の編集にあたり、優れた論文を投稿していただいたすべての著者の貢献にお礼を申し上げたい。また、予定通り発刊できたのは、多忙の中、短期間の査読に協力いただいた査読者の方々、市川裕介、由井蘭隆也、両幹事をはじめとする編集委員、学会関係者の多大なご尽力のおかげであり、ここに心から感謝申し上げたい。

「全ての人とモノがつながる社会に向けたコラボレーション支援技術とネットワークサービス」特集号編集委員会

- 編集長
塩澤秀和 (玉川大学)
- 幹事
市川裕介 (日本電信電話)
由井蘭隆也 (奈良先端科学技術大学院大学)
- 編集委員
市野順子 (東京都市大学), 市村 哲 (大妻女子大学), 井上亮文 (東京工科大学), 井上智雄 (筑波大学), 上杉繁 (早稲田大学), 江本啓訓 (電気通信大学), 大平雅雄 (和歌山大学), 岡田謙一 (慶應義塾大学), 岡本昌之 (トヨタ自動車), 金井秀明 (奈良先端科学技術大学院大学), 金子 聡 (日本IBMサービス), 川口信隆 (日立製作所), 爰川知宏 (日本電信電話), 小林 稔 (明治大学), 齊藤典明 (日本電信電話), 高田秀志 (立命館大学), 角田啓介 (NTTコムウェア), 服部 哲 (駒澤大学), 樋山淳雄 (東京学芸大学), 福島 拓 (大阪工業大学), 三樹弘之 (沖コンサルティングソリューションズ), 三末和男 (筑波大学), 宮田章裕 (日本大学), 湯澤秀人 (富士ゼロックス), 吉野 孝 (和歌山大学)

¹ 玉川大学工学部
College of Engineering, Tamagawa University
a) shiozawa@eng.tamagawa.ac.jp